

大雅堂遺聞 下

森 銑 三

九

玉瀾は専ら扇面を畫いて鬻いだとは以文會筆記の記すところであるが、その扇面について、二宮孤松氏の雲烟瑣談中に極めて興味のある記載がある。や、長くはあるが、またその全文を掲げておきたい。

閨秀にして南畫を善くしたるものは、應に玉瀾を以て第一とす可し。是れ獨り竹田の説のみに非らず。殆んど古來の定評なり。玉瀾は其の百合の子たるに於て、將た大雅の妻たるに於て、已に何となく欽慕すべき所あり。況んや其の人品の高雅にして其の筆墨の精妙たるに於てをや。世人が其の遺墨を珍重して措かざるもの、毫も怪しむに足らざるなり。余が見ることを得たる玉瀾の眞蹟中にて、最も賞翫すべきものは、小雲氏所藏の摺扇にして、無造作に描き出せる山水、却つて無限の趣味あり。左りの上方に大雅が、泉臨香澗落。峰入翠雲多。と云へる、沈佺期の句を題せる、其の書も亦ただ妙なり。此の摺扇は原と司馬江漢の所藏したるものにて、其の函に江漢の自筆にて大雅書玉瀾畫と認め、例の羅馬字にて江漢の名を記せるのみならず、扇の裏面に實に左の如き記文あり。曰く三浦侯の大夫九津見氏は俗呼んで唐人吉左衛門とて風流第一人なりけるが信州より京都によぎ

り玉瀾女の茶店にて扇を得て大雅を訪ひ上に一句を乞て東都に至て余に贈れり。藏すること殆ど三十年に過たり。今脇坂氏の需頻りなれば與へぬ。文化元年甲子暮、春波樓主人認と。玉瀾の畫にして、大雅の題字あり、已に太だ貴ふべし。然るを況んや江漢の久しく珍翫したりと云ふに於てをや。此の摺扇の如きものは、世間思ふに其類罕なる可し。

司馬江漢が愛翫してゐた玉瀾筆の扇子といふはいかにもめづらしいが、なほその扇子を江漢に與へた三浦侯の大夫九津見氏吉左衛門は、年少にして才名のあつた徂徠門の源京國こと久津見華岳その人であつた。文化元年を遡ること三十年は安永三年である。して見ると華岳は、安永の初年の頃京都に於てこの扇子を手に入れたのであらう。華岳の歿年は未だ判明せぬのであるが、この記載に據つて安永の初年にはまだ世に在つたことが知られる。

雲烟瑣談には、右についてなほ玉瀾のことが一條ある。それをもこゝに附載しておかう。

小雲氏が右の摺扇を購ひたるは、兩三年前のことにして、其の時同じく賣り物に出たる摺扇十數種あり。某氏も亦中に就て玉瀾の菊に百合の歌あるものを購へり。其の菊は紅白の二種にして、用筆の優美なる、配色の情致

ある、亦實に獲易からざるの品なり。百合の歌は、しめゆひしかきねながらに咲く菊の花も幾度の秋を契らん、とあり。其筆跡太だ温雅なり。

これに據つて、玉瀾の描いた扇子に母百合が贊をしたものなども賣つてゐたことが知られるが、相見氏著池大雅の口繪にも、玉瀾筆の桃柳の圖に百合の歌を題したものが載つてゐる。百合女の歿日は從來明白を缺いてをり、人見氏編の大雅堂年譜には、寶曆二年大雅堂三十歳の條に、「此年頃百合女歿ストモ傳フ、未詳」としてあるのであるが、實は明和元年大雅堂四十二歳の十一月九日に、享年七十一にして逝いたのであつた。そのことは水落露石氏の遺稿聽蛙亭雜筆の中に發表せられてゐる大雅堂の斷簡に據つて明かである。

きよくすむ心の月のくまもなく春秋も「森いふ。もの一字衍」しらぬ花のうてな

右百合病中吟、反古に記候を神主シシユのやう成ものにはり候。乍惶オソレ其一方に□

□眞に被遊候様奉願候。末期之吟相記べく筆研を乞候へども、娘本復を計、さしとめ候處、反古に記在。

七十一を以て終、明和元十一年九日（水落氏註。十一年とあるは十一月の誤記歟）

反古見出さるゝ前に黒谷方丈へ戒名願候處、清月と被下候。符合一奇也。

すなはち百合女は病中に右の「きよくすむ」の一首を詠じて、それを辭世として書殘さうとしたけれども、娘の玉瀾は恢復を慮つて差止めた。それでたゞ反古に認めておいたのを大雅堂は神主やうのものに貼つたのであるが、その一方に法名をであらうか、楷書で書いて貰ひたいと、右の書簡を宛てた某に請うてゐるのである。百合女の法名は清月と附けられたのであつたが、それは偶然にも右の病

中の詠と符合したことを大雅は奇としてゐる。これに據つて百合女の法名をも知ることを得たのである。

明和元年に七十一歳で逝いた百合女は元祿七年の生れで、大雅堂よりも二十八歳上だつたのである。

なほ右の百合女の辭世は、雙林寺中に建つてゐる高さ二尺ほどの小塔に刻してあるよしを、また相見氏著池大雅に據つて知つた。その塔も大雅堂の建つるところだつたのであらうか。

こゝになほ百合女のことを、いさゝか摘記しておいて見たいと思ふが、姫路の酒井家の土櫻井保美の隨筆「おきな草」の中に大雅堂夫妻のことより引いて、つぎのやうな記載のあるのがめづらしい。

但し保美は百合女をそのまた母の梶女と誤記してゐる。文中梶女とあるのはすなはち百合女のことである。

渠〔玉瀾〕の母は祇園の梶といへる歌よみの名高き女なり。そのかぢを余も見たり。寶曆十三年の頃六十餘の女にて、祇園の社地に出でて、筆硯と短冊を机の上に置いて、人望めば古歌或はみづからのよみうたなど書て遣し、謝禮に少しの銀錢を贈れば、うけ收めて世わたりとす。殊に能筆なりけり。梶の葉といふ集もあるよし。

保美が實際に見たといふ寶曆十三年は、百合女の歿する前年である。これを以てしても、その梶女といふの誤たることは明かであらう。寶曆十三年には百合女は七十歳だつたのを、保美は六十餘歳としてゐる。定めし年よりは若く見えたのであらう。歌集「梶の葉」はまた「さゆり葉」の誤である。百合女は、茶店に硯箱と短冊とを置いて、人々の求に應じて歌を書いたといふ。百合女の歿後、玉瀾

もまたそのやうにして描いた扇面などを鬻いでゐたのであらう。

その外にも、橋南谿もその剪燈隨筆卷四の中に、一年の春ある僧と共に東山に遊んだ折に百合女の茶店に憩うたところ、その僧は百合女と識つてゐて、「花の歌は出来たか」と問うた。百合女は茶棚の下から硯と紙とを出して認めて見せた。それを貰つて歸つて太田道雄に贈つたら、道雄がその歌を稱美したといふことを記してゐる。

百合女のこととは夙に山陽がその傳を書いてをり、主として月峰から聴くところに依據したらしいが、それは文章のための文章となり過ぎてゐて、その裡から正確な事實を抽出し難い憾がある。山陽も、「百合は何許の人なるかを知らざる也。或は曰く江戸の人也」としてゐるが、拾遺都名所圖會には、夫と共に東武から來て、梶女の跡を嗣いで茶店を營んだとしてゐる。夫と共に到つたとすると、落魄して京都に流寓してゐた徳山某を進んで保護したといふ山陽の傳とは違つて來る。玉瀾の父が徳山姓の人だつた一事は、大典が大雅堂の墓碑銘の後に、「妻玉瀾、姓徳山」としてゐるのに據つて明確であるが、その徳山某の何者だつたかは未だ判明しない。島田筑波氏は大正四年五月一日發行の雑誌日本及日本人に「玉瀾女史とその父」と題する短文を發表して、問題の徳山某は旗本の徳山五兵衛秀榮とせられた。しかしその島田氏の説にも首肯しかねる點がある。百合女の夫のことは他に資料の出づるまで、なほ疑問としておきたいと思ふが、屠赤瑣錄卷五に載せてゐる同女の詠草の端書に據つて、男は百合女と別れて京都を去つてからも、百合女の許へ文通してゐ

た事實が知られて來る。その詠草といふはつぎの如くである。

としごろ願ひありて娘とひとしく思ふ人の、こゝかしこわかの浦、熊野詣
ふでし、雪のあした、山のけしきなどいふおもしろきよしせうそにいふ
こし給ふに、かへしすとてよめる。百合。告こすを聞ぞうれしきみ熊のの
山のかひある（原註。以下缺ク）

百合女の年齢は幸にして知ることを得たが、玉瀾の年齢は未だ確實にし難い。池大雅名畫譜附載の年譜には、延享三年に玉瀾十九歳としてゐる。それに據れば享保十三年、百合女三十五の歳の子となり、歿した天明四年には五十七歳となるが、私はまだこの説の出處を詳かにすることを得ずにある。相見氏は紫雲石の過去牒に五十八歳とあるよしを報せられてゐるが、なほそれを傍證する資料はないやうである。たゞしばらくその説に隨へば、享保十二年の出生で、大雅堂より少きこと四歳だつたことになるのである。

十

大雅堂の高弟の一人に紀伊の野呂介石があるが、その介石の談話を門下の某が筆録した四碧齋畫話一冊の中には、大雅堂のことがまた散見してゐる。傳記の資料としては特に擧ぐるに足るほどのものもないが、頃日靜嘉堂文庫本に據つて寫して來たのをこゝに載せておくこととする。文中翁とあるのは介石を指すのである。

或時翁に四君子の畫を請ふ人あり。……梅は霞樵山人の意を用ゆ。霞樵常にいへらく、眞を畫けば風韻薄しと。然らば眞を寫さずして些しく花の形を大に書く。満開却て風致あり。……

眞を畫けば風韻薄しといふ。蘆と誤られさうな墨竹を描いたりしてゐる大雅堂の作品が、始め俗眼に入らなかつたのもその筈だつたであらう。

翁曰く、壯年に黄子久を慕ひ、何卒して子久の筆蹟を得んと欲して苦心せしに、時に大和の一古寺に子久の幅を藏しありと聞き、はるく彼地に至り、寺に就て一見を乞ふに、寺僧知らずと云ふ。我聞く、先年高芙蓉と大雅堂と登山して閱せし事あり。當寺に在るに疑ひなしと、強て乞ひければ、寶藏を搜し、古幅を出せり。展觀するに黄子久の天池石壁の圖なり。余喜びて、一本を模して歸り、朝夕に展觀して頗る此道に悟入する處あり。其筆意に倣ふて遂に一家の妙格を成せり。……

こゝにも高芙蓉のことが見えてゐる。その大雅堂と大和に遊んだといふのはいつのことだつたか。

翁は祇南海の畫論を藏せり。此書は、祇南海私意の畫論を述べて彭百川に示す。百川より大雅堂に傳へ、大雅より翁に傳ふ。元南紀の人より傳はる書なれば、又南紀の人に贈り還すと云ふ大雅堂の意ならん歟。

こゝに彭城百川と大雅堂との交渉の一端の記されてゐるのが注目値する。百川のことは西山拙齋の間牕瑣言に、「畫人彭百川、清貧寡慾、拔俗の韻あり。環堵蕭然、食或は給せず。而して恬暢靜處、以て憂と成さず。亡後門人其の橐を開くに、猶名家の書畫數幅百金に直すべきあり」と記してある。その清高な人格は、大雅堂とも大いに契合すべきものあつた人だつた。しかも他にこの二人の交渉について知らるゝところのないのを遺憾とせざるを得ぬ。なほ百川、大雅堂、介石と轉々した南海の畫論は、その後いかに成行いたかを知らない。

或時中國の儒生翁を訪し。清談時ありて問ふて曰く、大雅堂の居室の雅趣、其廣狹は如何と。翁即ち筆を取りて室の圖を畫きて示す。儒生重ねて落款を需む。二寸計りの字體を以て、大雅の室是なりと識せり。儒生大ひに悦んで曰く、扶桑第一の雅室を、扶桑第一の雅人に畫かしむと、欣然と詩囊に納めて去る。

介石が「大雅堂の室是なり」と書して與へたといふ圖は今見ることを得ぬが、別に描いた「池無名居室圖」といふ略畫が、池大雅名畫譜に載つてゐる。それは一志齋主人といふ者が寛政四年に描かしたもので、なほ漢文を以て、介石から聽取した説明をもそれに附記してゐるが、その中に「霞樵喫飯の際、數雀案頭に聚る」などとしてあるのがめづらしい。大雅堂には雀までが親んでゐたのである。

或時翁話して曰く、昔時大雅堂に學び、其室に通ひて終日談話すれども、大雅倦怠の色なし。我謝し去る時、必ず門に送る。固辭すれども許さず。門に立つこと久し。數十歩にて願れば、其時戀々として別る。其切なること誠に感ずるに餘りあり。

同じく池大雅名畫譜の後に附載してある月峰筆の大雅堂の住居の圖を見るに、家の前を西の方に數十歩隔て、形ばかりの冠木門があつて、そのところの説明に、「大雅堂へ行客、此門より往來す。へぎを立て、中に、此門より御通可被下候。大ガト認め有」としてある。常に介石を送つて出て、その後影を見送つてゐたといふのはこの門だつたのであらう。大雅堂はさうした誠實の人であつた。

翁曰く、我幼年より蘭嶼に隨身し、學を受く。又十四歳の頃より畫事を好む。多く支那名家の幅を求め得て煉磨すれども技進まず。後に大雅堂の門

に遊び、山水を作る。大となく小となく日に圖する事十景、此くの如くする凡十年ばかり、又公事にて熊野山中に入り、深山幽谷の別ちなく跋涉留在する數十日、依て憶ふに、畫事によりて公事を廢すべからずと。然れども自然と山水の旨趣を得意す。假令筆を捨たりとも、意を山水に置けば、自然に默識して神に通ず。

大雅堂の門下で、介石と比肩する者に福原五岳がある。頼春水の師友志に、大雅堂と五岳とのことを記した一條があるのを、ついでにこゝに載せておかう。

余福五岳子を京師に訪ふ。池大雅坐在在りて云ふ、將に主人と高野に遊びて、其の山水を寫さんとすと。五岳酒を命じ、半醺して行装を理せず。大雅飲を解せず、數數裝を促す。五岳乃ち言ふ、樽を倒けて止まんと。仍ち余輩に勸めて交酌して已まず。大雅筆を援きて詩を賦して云ふ、樂聖福先生。倒樽曰爲度。倒樽又倒樽。倒樽終無度と。五岳堂に樂聖と扁す。故に曰ふ。

頼春水は明和三年以降十餘年に互つて大阪に在つた。して見ると右の事實は、大雅堂の晩年十年の間のことだつたのである。右には「大雅飲を解せず」とあり、前掲の書畫聞見録には、「その人至て篤實にして酒も飲まず」とある。大雅堂の作品には醉墨などとしたものもあるにはあるが、その人は元來下戸だつたのである。

兼康愷の浪華詩話には、右の條を殆どそのままに出してゐるが、なほそれについて五岳のことをも簡單に記してゐる。その條をもまた附載しておかう。

五岳人となり風流瀟洒、磊磊落落、眞に神僊中の人也。詩を善くし、書之に次ぐ。畫は即ち其の傍伎也。然れども門人閨苑、春嶽、杏堂の若き、皆

出藍の稱あり。能く教ふる者と謂ふべき也。

閨苑ラウエンは林氏、名は新、春嶽は鼎氏、同じく名は新、杏堂は濱田氏、名は憲、三人共に大阪の人である。

十一

大雅堂と交際のあつた諸家の著述中に大雅堂のことの記されてゐるものは相當に多いが、その中最も珍重すべきは、清田儋叟サイダの隨筆孔雀樓筆記所載の逸事であらう。これは最も信賴のせらるゝものたる上に、記者の儋叟がまた人格の人であり、儋叟を通して大雅堂を見ることを得るところに特別の興趣があるのである。尤もこの條はすでにしばしば諸書に引用せられ來つてゐるのではあるが、なほ且つ割愛するに忍びない。よつてまたその條の全文を掲げておくこととしたい。

名の實に稱カキへるは大雅堂なるべし。駟會の風、輕薄の習露ばかりもなし。彼が事實の奇稱すべきを詳にせば、棟牛にも至るべし。かつて予に語て曰、僕若かりしとき馬術を習ふ。其師のいわく、そことも武士に非ず。騎馬の術を學得ても益なし。されど遊方僧一般に旅遊せらる。足勞せば款段に跨るべし。落る術を習はざれば怪我すべしと。僕これを是として學ぶ。所謂からしり、のりかけ、二寶荒神、三寶荒神なるまで、盡くにその落方を習ひ得て、危難を免しこと度々ありと。又嘗て謂らく、かつて和州に遊び、宿頭を失す。已に夜に入る。一寺へゆき、書牘を投じて宿を請ふ。寺僧許さず。とある所の竹林の中に入て、跌坐して曉を待つ。終夜なにやらん傍に籟々地に響きし。夜明てみれば、簑にも笠にも小蛇數條まつはれ居たりと。債を人に贖ふことは甚正しく、債を人に求めることは甚疎にしてかつ寛

し。これ尋常異人と云はるゝ者の眞似ても及ばざる所ぞ。若かりし時三條種の口に居。畫扇並に石印彫刻を業とす。債を求るの簿帳を篆書す。一歳客遊して、臘月に家に歸らず。老母一族など聚り、世にいふ書出しなる者を調んとす。正文といひ、殊更篆字なれば一向に讀めず、解せず。龜屋左助を頼み、やう／＼にその半を支度せし。他日一族ともこの事を言てしかる。あやまり服す。これより篆文はやめ楷書す。書經金丹の世にいふ二階本に楷書してありしは、予まのあたりこれを見たり。譬は中等扇三柄、某先生携歸、估直既濟とか、或は未濟とか書す。これすでに老母及び一族の理會せざる所ぞ。況やこれを篆書せしをや。大雅が書畫は逸品に入るべし。畢竟一點の俗惡の氣なし。

諸家の詩文集中大雅堂のことの最も多く見えてゐるのは皆川淇園の淇園文集であらう。その中の「大雅堂畫帖跋」の一文はすでに掲げたが、なほその卷六に「池大雅飲中八僊畫卷首」の一文があつて、その中大雅堂が人と應對中にも、常に指を以て揮毫の狀をなしてゐたといふ性癖の記してあるのがめづらしい。全文は左の如くである。

池生大雅飲中八仙圖、一仙ごとに一圖を作りて、副ふるに其の詩句を以てす。其の書一體ならずして其の畫氣亦皆粗逸豪宕たり。卷末に自ら識して醉墨と云ふ。蓋し余嘗て池生を識る。其の人平生の志、常に用筆の法を學ぶに在り。客に對して談話するの間と雖も、其の指常に把筆の狀を作して、以て空に席上に畫いて終日已まず。乃ち其の作書作畫の時、亦其の意其の形跡に在らずして用筆に在り。其の細大疎密、亦唯其の意の到る所、是を以て時ありては書或は畫に似、畫或は書に似たり。或は童子の塗鴉、醉漢の澆墨の如き者あり。而して他人の毀譽する所は則ち恬として意に介せず。此は乃ち更に其の醉時の作に出づ。則ち其の書畫結密を事とせずして此の

散漫を作す者、固より其れ宜なり矣。然りと雖も池生の筆は唯其の墨色に別に一種の風韻あり。他人の摸擬を得る能はざる者其の中に存せり。此れ唯識者と言ふべくして、鄙夫俗士は之を知ること能はざる也。つぎに同じく淇園文集から「摹刻池無名寄興雲烟畫卷跋」の一文を掲げる。この中からは大雅堂歿後のことの知られて來るものがあるからである。

池無名、樹點石貌山皴を畫いて、及び人物宮室舟車を點綴す。各式總べて若干、其の首に自ら寄興雲烟の四字を題す。一卷蓋し本人の需に應じて之を作る者なり。無名門人僧辰良、字は月峰、手摸して上木す。其の眞跡、余亦之を觀る。其の筆力遒逸、風趣清拔たり。乃ち亦其の平素多く見ざるの傑作也。始め池無名已に老いて子なし。而して四方共書若くは畫を求むる者甚だ多し。然れども時ありて又獨り自ら興に觸れて其の爲さんと欲する所の者を爲すこと無慮數百にして、以て之を其の妻玉蘭に遺す。其の意蓋し己沒して後之を鬻いで以て其の緩急の需に給せしめんと欲する也。玉蘭歿するに及んで、其の蓄ふ所の書畫尙篋笥に盈溢せり。門人乃ち相與に謀りて之を鬻ぎ、其の獲る所の金を用ひて、大雅堂を雙林寺の側に營む。庶くば以て其の師の蹤を後世に存するを得ん焉。堂就るに及んで、乃ち無名の舊門人青木生をして之に居らしむ。幾くもなくして青木歿す。而して月峰因りて雙林西阿彌より遷りて、來つて大雅堂に居る。今此の卷を摹刻する者は、乃ち亦其の板を傳へて以て堂の常藏と爲さんと欲する也。月峰余の嘗て無名と善かりしを以て來り請ふ。是を以て之を題後と爲す。

大雅堂は生計を意としなかつたが、しかも妻の玉瀾のために特に數百點の作品を残して歿したのであつた。しかし玉瀾はまた自作の畫を鬻いで生計を立て、亡夫の遺作の多くを散佚せしめなかつたのであらう。雙林寺の側に建てた大雅堂に最初にゐた青木某は、す

なほち夙夜である。その夙夜が歿して、月峰が大雅堂の第三世となつたのであつた。

なほ大雅堂の歿した時家に餘財のなかつたことは、介石筆の草堂の圖の説明にも、「霞樵死するの時米錢の貯なく、多く古書畫を貯ふと云ふ。其の清雅以て見るべし焉」してゐるのに據つても知られるのである。

洪園が右の跋文を書いた摹刻寄興雲烟畫卷は、たゞ大雅堂畫譜として行はれてゐるものである。そして同書に添うた右跋文には、終に「享和三年癸亥冬至後一日、皆川愿書」としてゐるのに據つて文の成つた時が知り得られる。

なほ大雅堂畫譜には、月峰の跋文もあつて、洪園の文と併せ見べきものがある。

亡師故雙林寺謙阿上人、小少より先生〔大雅堂〕と友とし善し。嘗て和歌を好み、同じく冷泉相公の門に學ぶ。先生家極めて窮乏なり。上人乃ち山中空闲の地に於て書畫を鬻がしむ。來往者の請乞するもの頗夥し。然れども潤筆の有無を問はず。時人皆之を奇とす。山中毎に法會あり。夫妻同じく來つて隨喜念佛す。時に余尙幼、日に先生に従ひて書畫を學ぶ。先生没するの九年、妻玉瀾没せり矣。是に於て同社と謀りて小堂を嘗て書畫を鬻ぐの所に建て、先生居る所の號を取つて、命じて大雅堂と曰ひ、以て先生平日奉事する所の大悲像及び其の先世の鬼簿を安置す。今者此の帖を得、摹刻して之を堂中に藏す。唯恐る、腕拙筆劣、其の眞を失ひたらんことを。覽る者幸ひに炤察せよ焉。辰亮敬識。

これに據れば、大雅堂は雙林寺の住持だつた謙阿と善く、後に堂を建てた寺側の地は、嘗て謙阿の勸に依つて書畫を鬻いだ場所だつたのである。

たのである。

雙林寺側の大雅堂のことは拾遺都名所圖會や花洛名勝圖會の挿繪に據つてその様子が窺はれるが、木下長嘯子の靈山の歌仙堂の柱や礎などを使つて、大雅堂を一に歌仙堂などともいふのはその意を得難く思はれる。

大雅堂はなほ生前玉瀾と共に雙林寺の法會に臨んだこと、平日觀音像を奉持してゐたことなどが右の文に據つて知られるが、その觀音像については大典の小雲棲稿に、「池居士の家、觀音大士像を安んず。毎歲七月十七日、同社二三輩と奉じて以て音羽に往き、瀑泉に灌浴を爲し、歸りて齋を設けて供養すと云ふ。之を聞きて賦寄す」とせる七律一首がある。その像が後に大雅堂に安置せられてゐたのであつた。なほその後大雅堂の二世となつた青木夙夜が寛政十二年にこの像のことを書いた記文が相見氏著池大雅の中に載せてある。

十二

洪園については、村瀬栲亭の栲亭稿の中にも大雅堂に關する文が數篇あり、殊にその「池貸成山水畫譜題辭」の一文中には、逸事なども記されてゐて興趣が深い。尤もこれはすでに相見氏の著池大雅にも引用せられてゐるのであるが、やはりこゝにその全文を載せておくことゝしたい。山水畫譜はまた前記の寄興雲烟畫譜のことである。

蘇長公嘗て謂へらく、畫工なりと雖も而して格卑ければ、庸品たるを害せずと。何となれば則ち工拙は伎の精麤に在り、品格は其の人に在り。故に畫に奇なる者は其の行や必ず奇なり。何を以て之を言ふ、虎頭は癡を以てし、襄陽は顛を以てし、雲林は迂を以てす。近代繪事の工殆ど古に逼る。而して品格を以て之を論ずれば則ち何ぞ其れ寥寥たる。謝長庚固より氣韻妍秀を以て勝る。然り而して縦横の習氣を脱盡するは唯池貸成に於て之を見る。余少うして其の人を識る。蓬髮垢衣、謙虛にして物に忤はず。而して其の爲す所、事人の意表に出づ。貸成没して子無し。其徒積中遺す所の書畫數十幀を鬻ぎて、小祠を東山雙林寺の山中に建て、祠前に一草堂を葺きて、匾して大雅と曰ふ。以て貸成居る所の號を存する也。仲月峰幼より畫を貸成に學ぶを以て來住す焉。長喜の下院と爲るや、問者山水畫譜一帖を得、模刻して將に之を堂中に藏せんとして、余に題辭を徵す。余曰く、我之を聞く、兩生あり、貸成に従つて遊ぶ。甲嘗て五金を乙に借る。莽を過ぎて乙之を徵索す。甲曰く、業已に之を賸せりと。爭執止まず。遂に之を貸成に質す。貸成叱して之を逐ひ、自ら藏する所の書數部を鬻ぎて十金を獲、兩生の家に往いて、各五金を與ふ。兩生慚怍苦辭す。貸成怫然として衣を拂ひて去る。西土の一士人役に江都に徇し、途京師を過ぎて貸成を訪ふ。貸成之を送ること一日復一日、遂に富士山下に至りて歸る。其行や始より之を婦に謀らず。婦亦恬然として以て意と爲さずと。識らず諸有りや。月峰曰く、然り、素より聞く所也と。乃ち題して曰く、古人書を以て心畫と爲す。畫亦復爾る爾。此の帖を見る者、宜しく是くの如きの觀を爲すべし。

大雅堂畫譜に添うたものには、文の後に「享和三年十一月己未、栲亭老人源之熙撰并書」としてある。

東陽は大雅堂の狀況を敘して、「蓬髮垢面、謙虛にして物に忤は

す」としてゐるが、これはその遺像に題した六如の詩の初句に、「鶴衣蓬髮意怡然」としてゐると合ふ。

門人同士の金錢上の争を處決した行爲など、私等をして襟を正さしめる。大雅堂には、親しむべくして狎るべからざる、かやうな厲しい一面さへもあつたのである。

栲亭稿にはなほ「題池貸成水流帖」といふ文もあり、その中には「近日書畫を善くする者亡慮數十家、工拙は姑く論せず、其の飄飄出塵の思ある者、唯池貸成を然りと爲す。余嘗て其の人を識り、且つ其の行事を聞く。頗る古逸民の風あり矣。宜なる乎、其の筆を下して塵氣を脱するや」としてゐる一節がある。

大雅堂と實際があつて、その人品のまた善かつた香川適園の東隴庵集にも大雅堂に關する詩が數首あるが、これはまだ何人にも顧みられずにあるらしい。適園の詩はまた清雅愛すべきものがある。よつてその全部をこゝに舉げておかうと思ふ。

甲午春遊伊齊、欲攀礪山鸚鵡石、大雨不得到、歸後池大雅爲寫圖見贈、詩以謝之。聞說海南之山鬱崢嶸。中有響石抽地生。歌嘯琴笛巧相和。千秋不虛鸚鵡名。今春遊覽五瀨州。烏頭預擬其中遊。狂風痴雨沿海道。曠曠不許到山頭。大雅山人高簡士。豈惟丹青稱畫史。深惜野性遊賞遠。輒揮彩毫盡妙伎。幾重峰巒遶溪灣。展觀卽覺堪怡顏。彈渦駿法精且細。山人眼中無房山。一片奇石隔修竹。松柏林泉紛在目。相對何啻同攀躋。長移佳境置書屋。

(分註。元高彥敬、號房山、善山水、巧于渦斲法)

甲午は安永三年、伊齊は伊勢の宛字である。

秋日過大雅堂有感賦(分註。堂在雙林寺前)。書禪畫隱養高情。懷古雙林百

感生。華髮逃塵豈逃病。青山埋骨不埋名。松筠靜鎖虛堂影。鐘磬寒隨落葉聲。何用祠前薦蘋藻。白雲千載爲君清。

東山畫史池貸成挽詞（分註。池常云、東山峰巒、是吾家之粉本也。）生來無夢到塵寰。臥病蓬蒿甘閉關。一旦身追春色去。千秋魂與曉烟閒。松風月弔新封土。花雨鶯愁舊隱山。粉本不隨長夜盡。峰巒依約彩雲間。

大雅堂が東山の風光を愛したことは、前掲の詩に據つても知られるが、たゞ愛したといふ以上に、畫道の上に得るところ學ぶところが多かつたのである。

東山訪大雅山人不逢。雙林寺外艸萋萋。華頂山南夕照低。閑掩蘿關人不見。一聲長嘯葛原西。

津藩の津坂東陽は寶曆七年の出生で、大雅堂には三十四歳の後輩であるが、安永三四年の頃十八九歳にして笈を負うて上京し、極めて晩年の大雅堂を識つてゐたのであつた。その隨筆曾瑣録中の一章はすでに抄出したが、なほ帝國圖書館に藏するその東陽先生詩文集には、また文の大雅堂に關するものが數篇ある。その中からまづ「觀大雅道人五嶽圖書其積蓋之背」の一文を掲げる。

大雅池無名本邦畫品第一たり。余少にして嘗て相識る。其の人となり冲澹性に任じて自適し、滿腔子の雅韻毫も塵俗の意なし。幾ど是神仙中の人たり。資くるに學殖徳義の氣を以てす。他人能く及ぶこと莫き所以爾。奥田恕堂珍藏の著色五嶽の圖、落筆沈着にして痛快、神彩突突として人を動かす。居然たる勝概の氣象、人をして背を決し胸を盪せしむ焉。恕堂酷だ大雅を喜び、尤も鑒識に精し。妙蹟に遇ふ毎に背を論ぜずして購取す。收むるところ三十軸を下らず。要するに當に是を以て壓卷となすべし。每幅各題詠あり。鶴臺、觀瀾、平洲、大室、大湫、亦皆一時の名儒也。此寔に天

下の寶にして但席上の珍たるのみならず。其れ宜しく韞積して家を鎮すべし。輕しく人に示すことなかれ焉。

奥田恕堂は三角の後になる人である。大雅堂の書畫を藏すること三十軸を超えてゐたといふ。それらは今いかゞ成行いたのであらうか。その五嶽圖に題した鶴臺は瀧長愷、平洲は細井徳民、太室は澁井孝徳、大湫は南宮岳であらう。觀瀾は三宅緝明にしては他の人々よりや、時代が遡る。當時の儒家にも同號の人があつたのであらうか。

つぎにまた同詩文集中の「記大雅道人事」の一文を掲げる。

大雅道人、天資灑落、世故に搜カらずして、物外に超然たるは、畫品神妙なる所以也。嘗て播州に遊ぶや、書寫山を過ぎて、阪を登ること將に半ならんとす。一貴僧下山し、人に遇うて立談す。蓋し廳新たに成り、頗る輪奐たり。因りて名手の畫を請はんと欲す。而して未だ其の人を得ざる也と。道人之を聞くや意興勃發し技癢禁せず。急に上方に造り、遊覽に遑あらずして其の寺を物色して某院たるを知り、徑して其の門に詣りて曰く、僕は京都の畫手にして、院主の舊識たり。今諸と塗に遇ふ。新室落成して揮灑を請はる。行急にして留ること能はず。請ふ速かに墨を磨れと。徒弟奇遇を歡喜し、咄嗟役を奉ず。道人盤礴臂を攘ひて、巨竹數本を作る。淋漓掃灑、毫風墨噴、流電の空に激し、驚鷹の天に戻るが若し。觀者睹若として驚呼せざる莫し。滿室爛漫、須臾にして便ち成る。酒食を供すれども喫せず。院主の歸を惧れて、筆を投じて徑出し、倉皇下山し、敢へて一勝を探らずして去る。主僧院に歸り、以て狂客の亂要と爲し、搔首攢眉、惆悵嘆息する而已。後其の天下の名筆たるを知り、乃ち始めて事を貴重し、遂に山中の一名勝となる。遊客請うて觀る者多し焉。

東海道原の旅宿で、無断で屏風に富士山を描いて逃走したといふ逸話とよく似てゐて、やゝ疑問を抱かせられる點があるが、書寫山中には今も大雅堂の畫を藏する某院といふがあるのであらうか。

十三

高芙蓉、韓大年と善く、皆川洪園、清田儋叟、木村兼葭堂、香川適園等と善かつた柴野栗山はまた大雅堂をも識つてゐたであらうか。その栗山文集には「題池無名山水書畫帖二則」「跋大雅書後」の二篇があり、栗山堂詩集には「題大雅堂墨竹」の七絶一首がある。しかしこれらの詩文以外には何等大雅堂とのことを徴すべきものがない。中井敬所翁著日本印人傳の芙蓉の條には、「芙蓉性坦率にして、人と交るに擇ぶ所なし。而して大雅及び栗山を尤も莫逆と稱す」といひ、「凡そ花月を賞し書畫を品する、輿^{トモ}俱にせざる莫し。而して其の衣服を典し書冊を鬻ぐ、亦必ず相謀る」云々といつてある。この後の文は栗山の「芙蓉私印譜序」には同一のことが敘してあるのに據つたのであるが、それは芙蓉と栗山とのことで、大雅堂はその内に加へられてゐない。大雅堂と栗山とを特に親善だつたとするはいかがであらうか。栗山は大雅堂より少きこと十歳だつた。

大雅堂の歿後、門人等がその遺墨を鬻いで得た金で碑を建てようとして、栗山に撰文を乞うた時に、栗山は賛意を表せずして、それ

よりも石の一大巨像を作つて大津栗田口の道から望まれる山の中腹に安置して、それを大雅佛と名づけて故人を記念するか、しからずはその金を悉く都下の細民に頒ち與へては如何といつた。二案共にさすがに大雅堂を知る人の言であつた。しかも門人達はそれらの案に隨ひ得ずして、碑を建て、堂を建つる平凡な舉に出でた。大雅堂の門人中にも没曉漢が多かつたのである。

なほ大雅堂と交際のあつたことの知られてゐる人に、儒者にして書家を兼ね、兼葭堂と特に關係の深かつた大阪の細合半齋がある。その著合子家集には、「三嶽行贈池道者」と題する詩以下、大雅堂に關する仕が多く出てゐることの控を有するが、同書はこの稿の起草に際して再閲することを得なかつた。

大阪の木村兼葭堂は、少年の頃より大雅堂に親炙し、後にその年譜を編次しておいてくれた功勞者であるが、兼葭堂雜錄中の數條の記載を除いては、大雅堂と同人との交遊については知らるゝものが少い。たゞ私は上田秋成が書いた兼葭堂の略傳「あしかびのことば」の中に、十二歳にして僧淨博から畫事を學んだことについて、「又其比しも、みやこに池野無名なる人あり。是は山のため、すまひ、水のながれの見どころあるを、もろこし人の法もて、世にあやしきまで巧なせり。さるわざをしも此許にまゐりて問學びしさへ年あり」としてあるのを知つてゐるに過ぎぬ。

但し大雅堂筆の瀟湘八景の畫帖を、兼葭堂の歿後三十年近くを経た文政十二年に、田能村竹田が第二代の主人から示されたことを屠

赤瑣瑣錄卷四に漢文で書いてゐる。恐らく兼葭堂の遺品だったのであらう。その文はすなはち左の如くである。

己丑六月十一日、兼葭主人大雅翁畫帖三を寄示す。其の一を瀟湘八景と爲す。每景古人の法を用ふ。悟心師爲に其の詩を書す。卷首に高芙蓉意在瀟湘の篆字を作れり。蓋し池翁盛年意を用ひるの作にして、悟心芙蓉二人の書亦佳なり。紙墨新鮮、滿幅猶濕へるが如し。亦一快觀也。

竹田は大雅堂の崇敬者であつた。大雅堂の遺作を観ることは、その最も悦としたところだつたであらう。右の畫帖に詩を題した悟心は淨土宗の僧で、名を元明といひ、一雨庵また荷庵と號した。大雅堂の印樞の銘を作つてゐる人である。書を能くし、詩文に巧だつたと鑑定便覽に見えてゐる。

福岡の龜井南冥が大雅堂を訪問したことは近世叢語に依つて知られてゐるが、その記載は南冥の我昔詩集「池大雅」の詩の引に據つたのであつた。こゝに改めてその全章を掲げる。

池大雅、名は無名、字は貸成、余嘗て其の廬に到りしに、大雅適ま名山記を讀めり。顧みて余に語りて曰く、盤古洪荒の時一巨靈あり。手づから沙石を掬して此彼に頒置す。大者は喬嶽と爲り、小者は培塿と爲り、以て吾輩行樂の地と爲る。大賚と謂ふべし矣と、贊歎已まず。余以て眞の隱者と爲せり也。五六日を歴て再び之を訪ふに、會ま其の富士に行遊するに會して、再見するを得ざりき。近く僧蕉中が作る所の碑陰の文を讀みて、益々其の常人にあらざるを知る。文の略に曰く、貸成人となり蕭散にして、寵辱を以て心を驚かさず。善く物と和して苟合せず。興に交るに謙損にして阿らず。禮法に簡にして義を行らず。其の取與得失に於て恬淡如たり也。文及び書畫を能くし、山水を圖するに尤も妙なり。好んで名岳に遊ぶ。體

趨健にして、高峻を超え幽奥を極め、諸を毫端に發すること躍如たり。屢、富士に登る。又必ず路を異にし、見る所に隨ひて之を圖す。圖一百にして乃ち止む。狀態皆異、是古今の畫工の未だ及ばざる所也。妻玉瀾異操あり。亦畫を能くす。子無くして家絶ゆ云云と。蕉中は輩下の人也。大雅死して子なし。詣嘗て大雅と相知る者、喪事を匍匐し、遂に又石を立て、文を乞ひて之に刻す。謂はゆる死して朽ちざる也。墓の表面に篆して曰く、故東山畫隱大雅池君墓と、吁哉大雅を知る者、大雅の爲に知る所となる者也。死生亦大なる矣哉。花柳東岡一酒卮。餘酣笑傲澹鬚眉。愚人方朔清何巧。避地梁鴻見已遲。但便青山流水在。長將草聖畫禪隨。洛微君子斯焉取。船阜儼然大雅碑。

南冥が京阪に在つたのは、寶曆二十三年、すなはちその二十歳、二十一歳の兩年だつたやうである。その大雅堂訪問も、この兩年の内だつたのであらう。しかもたゞ二回赴いたに過ぎないのを見ると、恐らく十三年だつたのであらう。して見ると大雅堂は、寶曆十三年にも富士山に登つてゐるのである。

十四

大雅堂の作品について語るのは、私よりも他にその人があるであらうが、梅辻春樵の古桐餘響集の「題大雅堂遺墨後」といふ一文には、「池叟の書畫、其の價騰踊して眞贋相參じ、人多くは之を辨せず」といひ、「東山に一畫人あり。自ら畫を池に學び、故に能く其の眞筆を鑑ると稱す。多少の愚人、競ひて鑑定に趨り、落款なき者は、其の鑑印を乞うて以て證とす焉。池歿して五十年に及ぶ。其人年五

十餘、意ふに二三歳或は五六歳の時、従つて之に學ぶ歟。其の事既に信じ難し。況んや其の鑑定をや」といつてゐる。大雅堂の歿後五十年は文政九年であるが、その頃にはかなり贋作も横行してゐたのである。

なほ鈴木桃野の隨筆「反古の裏書」には、「此人「大雅堂」の畫、東都にあるはことごとくいつはりなるよしは、みな人のしる事」云々といつてあり、それについて、某年京都の某寺で大雅堂の門人達が師の追弔會を催して、その遺作を持寄つて展覧したところ、大雅堂の生前から師の僞筆を描いて生活してゐた男が遅れて來て、列んでゐる畫幅の内の三點を指して、これとこれとこれとは、己の贋作だといつたといふ話を書いてある。

大雅堂に關する文獻にも、かなりいかゞはしいものが存する。小杉未醒氏著大雅堂には、蕪村が大雅堂に宛てた書簡二通が載つてゐる。その一は、「又々今夜も願はくば一力へ向、御出かけ被下候はゞ珍重々々」といひ、「御藥も大極上々飛切の米の油用意させるつもりに候」といひ、「何卒御内政玉瀾の君も、ほむらなく御同道下され候様に祈るものならし」といひ、「酒百藥長、酒百惡長」といひ、「酒はたゞのまねば須磨のうらさびし」云々の歌一首を擧げ、「御出門あるかいなか、善惡左右共御返事奉願候」としてゐる。辭句が上づつてゐる上に、大雅堂を酒客扱してゐる一事に徴しても、眞赤な贋作たることが知られよう。

今一通は大雅堂から松茸を贈られた禮狀で、前者よりも一層たは

れたことをいひ、追書には、「尙々是に句とおほせ、御所望にまかせ吟ず」として、「松茸や喰ふにもをしくやるもをし」などといふ取りとめもないことをいつてゐる。著者小杉氏もその書の最後に、芥川龍之介氏から、右の書簡の同じものが諸方から出たといふことを聞いて眞贋を疑はれてゐたが、もし數通出たならば、そのすべてが贋造物であらう。なほ以上を書いてから潁原退藏氏編の蕪村全集を検したら、右二通共に參考として載せて、頭註に贋作と斷じてあつた。

その外にも小杉氏の著には、大雅堂の柳里恭宛の書簡二通が擧げてある。これは早く高安月郊氏なども引用してゐられたものであるが、その一には「彩色之事に就ての御説、一々御尤、所得利益尠からず候」といひ、雨漏に書齋悉く濡れ透つたといひ、「然り乍ら雨止み候へば、青天白日、鳥雀の囀聲、眞に一箇の別天地に候」といひ、「一月ばかり前より三絃を少し手に致し始め候」などといつてゐる。今一つの方には、「慈典和尚許罷越、色々禪の語承候」といひ、「玉瀾も大分彩色三昧に進み候事、偏に貴殿の薰陶と喜び居申候」といひ、「家道は不相變苦境に候へ共」云々といひ、「玉瀾も今者漸く苦境に馴れ候て、少しも心にかくる様の事は無之」などといつてゐる。これらの書簡は内容があまりに面白過ぎ、それでゐて私等に新事實を教へてくれるものがない。慈典和尚から禪話を聞いたなどとしてあるが、慈典といふは何者か。小杉氏は「僧六如と同人と云ふ」としてゐられるが、六如の名は慈周であつて、慈典ではない。慈周

の慈と大典の典とを併せたかやうの僧は多分なかつたであらう。玉瀾を大雅堂自ら玉蘭としてゐるなどいかに。この大雅堂の書簡も贗物である。かやうの書簡になほ心を惹かるゝ人があるならば、それは未だ真に大雅堂その人を把握してゐぬことになるであらう。なほ某畫伯蒐集の大雅堂書簡といふものがある雑誌に出てゐたのを見たことがあるが、それは秋田居容といふ更に耳にせぬ人に宛てたもので、「終日の霖雨寥々に奉存候。昨日御頼申候唐紙をこの者に給りたく候。山水一枚進呈仕候間、酒と交易仕度候。肴には味噌を嘗め可申と存候。頓首」とあり、これもまた大雅堂が酒客となつてゐる。原物は見ずとも偽物たることは明かであらう。

十五

その外にも、前にも一言した兼葭堂の追憶記は、十三歳の春柳里恭に伴はれて大雅堂を訪うたことを後に追想して書いたものとして諸書に引用せられてゐるが、私はこれをも疑はしく思ふ。それは、大雅堂に「その葛原の草堂」に見えたとしてをり、後に大雅堂がその家に於て歿したやうにしてゐるのであるが、大雅堂が眞葛原に住んだのはその晩年の十年足らずの間だつたことは、すでに敍したる如くである。二十餘歳の頃から同所に居つてゐたのではない。「入口六疊、書齋四疊半の只纔か二室のみの小さな構にて」としてあるのも、介石や月峰の描いてゐる草堂の圖と異なる。その外一體に

文章に古色が乏しく、大雅堂を大雅堂先生と呼び、里恭を權太夫人、權大人、里恭先生などと呼んでゐるのも何かわざとらしい。大雅堂が里恭と語るのに、「活氣話の上にあらはれ、よく語りよく罵りて、放談四隣を驚かせり」などとあるのにも、頭が傾けられる。大雅堂は今少し恭謹の態度を持してゐたであらう。大雅堂が半彩色の花鳥畫を示して教を乞うてゐるのをかしく、里恭が「彩色の上に少しく意に落ちぬ處あり」などといつたといふのも却つて作りごとらしく、「されど大雅堂はそれに服せぬやうなる有様なりし」などであるのもうなづきかねる。「それにつけても權大人の眼識の勝れたるは驚くべき事にて、この陋巷に住ひたる若き畫工夫婦を、今に天下の畫壇を左右するものなりと見られて、天下に名高き身を以て、下りて友の交を爲したるは格別の事なり」などといふ。措辭が生々しくて、天明寛政頃の文とは受取り難い。「それより後おのれも大雅堂に交ること深く、先生の浪華に遊ばるゝ時は必ずおのれの家に宿し、おのれの京都に上る時は必ず先生の家を訪ふを常とするやうになりしが」とあるが、兼葭堂はたゞ大雅堂と友人として交つたのではなく、大雅堂を師として畫を學んだのだつたことは、秋成の書いたその略傳「あしかびのことば」に見えてゐる如くである。しかも右の記文に一言もそのことに觸れてゐないのは如何。かやうに見來る時、右の兼葭堂の追憶記といふものは、たゞ兼葭堂の編んだ年譜の寛延元年二十六歳の條に、「當年兼葭堂十三歳、初て面會す」とあるのに暗示を得て贗作したのであらう。しかも割合に新しい明治

花
顛
筆
大
雅
像

京
都
辻
重
彦
氏
藏

同
玉
瀾
像

同
氏
藏

になつてからの贋作であらうかと考へられる。兼葭堂編の年譜は兼葭堂雜錄の中に收められてゐて、大雅堂に關する資料の一として重んぜられてゐるが、右の記文は勿論兼葭堂雜錄には載つてはゐない。その文はいつ何人に依つて始めて紹介せられたのであらうか。それらの點も突止めて見たいと思つてゐる。

なほ右追憶記中注意すべきは「玉瀾女史とは二年程前に婚したるよしなるが」といふ一句であり、これに據つて近く作られたる大雅堂の年譜の類には、延享三年その二十四歳の條に、玉瀾と結婚すといふ一項が加へられてゐる。しかし追憶記を贋作とすれば、この延享三年結婚の一條は當然抹殺すべきであり、すでに述べたやうに、大雅堂の結婚はなほそれよりも數年繰下げらるべきであらうと思ふ。なほ事實右の追憶記が兼葭堂の書いたものならば、一方の大雅堂年譜の延享三年の條にも、結婚のことを載せておいて然るべきである。しかるに同年譜には同年は空白のまゝになつてゐる。兼葭堂は實は大雅堂の結婚の年を知るに及ばず、そのために年譜にもそのことを記入するを得なかつたのであらう。この一事から推しても、追憶記は素性の怪しいものたることが知られるであらう。

その外にも安永元年の四月に催された大雅堂五十歳の壽筵の記といふものもあるが、これには十餘年前に歿してゐる柳太夫が「郡山よりわざ／＼來りて、この席へはつらなり給ふ」とか、「師の君「大雅堂」いと心地よげに兼葭堂のあるじ、又は柳太夫などと、さまざまに昔の事語り出でて」云々とかあつて、これもまた信じ難い。

なほ大雅堂の著作として一部の人々の間によるこばれてゐる書に春巒拆甲といふものがあるが、實はこれは智恩院宮の諸大夫だつた椋田阿波守直猷の著で、斷じてまた大雅堂ではない。そのことについては昭和九年四月の書物展望に「春巒拆甲は大雅堂の著にあらす」といふ一文を書き、更に同年十二月の同誌に「春巒拆甲の作者」といふ一文を寄せてそれを補足した。人見氏がその著池大雅附載の年譜明和五年の條に、同書を著したこと擧げられたなどは早計であつた。

藝術家としての大雅堂はもとより古今に獨歩するが、人としての大雅堂も同じくまた古今に獨歩する。その點に於て大典撰文の墓碑銘も、未だ十分にその人物を盡さざる憾なしとせぬ。しかしまた區々たる文字に依つて表現するのには、大雅堂の人格はあまりに高く、あまりに大きかつたともいひ得られるであらう。私もこゝに抽象的な言辭を列ねて、その人を讚歎することを敢へてしないでおうと思ふ。たゞその作品に對する時、諸書の記載を通じてその人に想ひ到る時に、大雅堂はなほ髣髴として私等の眼前に現出し來るのを覺えるのである。(昭和十一年一月十二日脱稿)

追記。前月號第十三章中の「京都智院袋町菱屋嘉左衛門」は、名家筆蹟考の記載をそのまゝに引いたのであつたが、「智院」は「智恩院」の誤植だつたよしの示教を森繁夫氏から得た。よつてこゝに誤を正しておくこととする。

なほ本稿起草に際して見るに及ばなかつた合子家集その他も、その後披閱して、大雅堂については更に多少の新資料を得た。近くまた補遺の一文を草して見たいと思つてゐる。